

地塩

No.424

2021. 12. 12

目次

発行日 2021. 12. 12
 創刊 1926. 9. 10
 編集 蕃山町教会執事会
 発行人
 印刷人 山陽印刷(株)
 発行所
 岡山市北区蕃山町2-15
 日本基督教団蕃山町教会
 TEL = (086)224-1322
 FAX = (086)224-1329
 三井住友銀行岡山支店
 口座 普通 0962358

礼拝説教

2021. 10. 17

「私を苦しめる神」

ヨブ記二七章一〜三節

牧師服部

修

三国志に登場する呂布はかなりの実力を持った人物なのですが、最後は曹操に捕まり処刑されてしまいます。それは劉備が、この呂布という男が義父を裏切って董卓につき、その董卓も暗殺した人物であることを忘れないように、と曹操に忠告したからです。呂布自身、人を裏切っていました。呂布もまた裏切られた経験を持っていました。裏切る者だからこそ裏切られる不安を抱えていたし、裏切られた経験を持つているからこそ、裏切ること生き延びざるを得なかつたとも言えます。そのことを考えると、裏切られた者が、自分も裏切ること自分の身を守ろうとするのは、程度の差はあれ私たちにも無関係ではないと思われれます。大なり小なり裏切ること・裏切られることの中に埋没して生きざるを得ない私たちだからこそ、裏切りに対して決して裏切りをもって返されることのない神さまの愛と救いをいただいていることが、いかに大きな恵みであるかが分かるのです。事実、洗礼を受けてクリスチャンとなると、私たち

は「神さま、私はあなたのことを一番大切にします」と約束をしました。ところがその約束を忘れ、神さまを裏切ります。でも、神さまは裏切ることには「その愛と救いを信じたからこそ、私たちは神さまを裏切ってしまった後ろめたさを抱えながらも神さまの前に出てくることができます。そして、礼拝を通して「あなたの罪、あなたの私に対する裏切りも赦しているから」との言葉が、裏切りの中に生きざるを得ない私たちの慰めとなるのです。この赦しの契約を私たちは神さまと結んでいるのです。

ヨブは、友人たちへの反論の言葉の中で「わたしは誓う」と言いました。ヨブはこの発言において「私は生きておられる神さまと契約を結んだ者だ」と言います。ところがヨブは契約の相手である生ける神さまを「わたしの権利を取り上げる神」とか「わたしの魂を苦しめる全能者」と表現します。表現だけから言えば、神さまのことが好きな者の発言であるよりも、神さまのことを嫌いな者の発言に聞こえます。

そして「わたしは誓う」「神は生きておられる」との宣言があるため、アンバランスが目立ちます。

一般的に「宗教」から想像されるのは、いわゆる御利益をもたらす、ということでしょう。御利益をもたらしてくれるのが神、という認識に立つならば、「わたしの権利を取り上げる神」「わたしの魂を苦しめる全能者」は明らかに真逆です。ヨブにしてみれば、こんな不幸ばかりよこす神など何の役にも立たない、と言って、神を棄てるもおかしくはありません。しかしヨブの基本姿勢は、「神から幸福をいただいたのだから、不幸もいまだこうではないか」であるし、この基本姿勢に立つならば、表現としては奇妙な表現になります。不幸をもたらす神に信頼して訴える、というのがヨブの、そして聖書の、そして私たちの信仰なのです。不幸をもたらす神に信頼できない、ではなく、不幸をもたらす神を信頼するのです。私を苦しめる神を、私を苦しめる神であるゆえに信頼する。

この信頼は、裏切る者をも裏切りをもって返すことは決してしない神さま、という信頼と一体です。私の裏切りを、裏切りをもって返すような神さまであるならば、不幸をもたらす神さまは決して信頼することはできません。でも、私の裏切りを、愛と赦しをもって受け

入れてくださる神さまだからこそ、不幸をもたらす神さまを信頼することができる。だからこそ、逆に神さまを信頼していない者は、私に不幸をもたらす神さまなど必要がない、と言って神さまから離れるのです。

それゆえに、二節や九節以下に描き出されるヨブのアンバランスさが、実際の私たちの信仰でもあるのだということに気付かされます。信仰とは、予定調和の中で何事もつつがなく過ぎ去っていくものではなく、生ける神と生ける私の関わり合いであるがゆえに、そこには予想外の出来事も、受け入れがたいと思われるような出来事も起こる。でもその時に、神さまと関わることを止めない、というのが信仰なのです。私たちの神さまは、黙って文句も言わずに従え、と私たちを脅迫する神さまではありません。どこまでも私たちのことを信頼し、私たちに裏切られても信頼し、愛と赦しをもって迎え入れてくださる神さまなのです。だから私たちも、私を苦しめる神を、しかし私を苦しめる神だからこそ信頼して祈り、従うのです。

本音を言えば、苦しみをもらうよりは楽しみをもらいたいし、不幸をもらうよりは幸福をもらいたい。ですが私たちの人生は常に良いことばかりではありません。つらいことも不都合なこ

とも理不尽なこともたくさんあります。その時に、つらいこと、不都合なこと、理不尽なことを全部取り除いて良いものだけをくださる神さまを求めたところで見つからないのが現実です。そうであるならば、つらいこと、不都合なこと、理不尽なことをすべて取り除く神ではなく、それらに対して苦しみ、涙し、もう嫌ですと訴えることのできる神さま、そしてそういう悪態をつくような訴えに対しても耳を傾け、共に歩み、愛と赦しをもって迎え入れてくださる神さまこそが、労苦に満ちた私たちの人生の慰めになると言えます。もつとも、訴えているその時すぐに慰められるわけではないし、いつまで苦しいのだろうかという不安を抱えつつ、であることも多いのですが、なおその中で、私を苦しめる神に向かって、「私は苦しいのです、神さま分かってください、何とかしてください」と祈れる方が、幸いをくださらない神などいらないと、神さまを諦めることよりも希望があります。それなのに私たちは罪ゆえに神さまを諦めることを選択してしまうのです。

ヨブの発言に見られるアンバランスは、まさしくアンバランスな人生を生きざるを得ない私たちがいかにして信仰によって神さまとの関係を保ち、希望を失わずに生きるのかを示した言葉だと

言えます。アンバランスであることを、理不尽であることを、そして不都合であることを嘆きながら絶望して生きるのではなく、嘆きながらも希望をもつて生きていくためのアンバランスだと言っても良いでしょう。一年先どころか一分先でさえどうなっているのか分からないのが私たちです。存在そのものが不確かな私が、全て恵まれて生きる、などということは不可能です。ではどうにもならないところで諦めて生きるのか、それとも神と共にあがくのか、二つの道があるとするのなら、信仰者は後者を選ぶ。

フォーサイスは『祈りの精神』の中で、「神の意志に逆らうことも神の意志にかなう場合がある」と述べ、「神の愛される反抗」と表現し、愛の反抗は憎悪の反抗とは全く異なると述べます。

ヨブが今の境遇に陥ったのは確かに神の意志です。しかしヨブはこの境遇に甘んじてそこから脱出しようとしなかったのではなく、反抗することで神さまの真の意思に到達したいと欲しているのです。フォーサイス的に言えば、ヨブの反抗は神が喜び、神が求めている反抗、と言えます。

私たちが祈る時に、実際に「私を苦しめる神さま」と祈り始めることはまずありません。でもこの神さまが絶対

に裏切らないお方であることを、しかも御子を十字架の上に乗せておかけになつて、「わたしの愛と赦しは決して裏切らない」と強く宣言してください。たのならば、私たちは、苦しいから信じゃない、つらいから信じたくない、ではなく、全てを神さまの御手に委ねて生き、時として反抗しても、呼び求めることを止めないことが本当の意味で慰めに満ちた服従になつているのであつて、神さまに抵抗せずに不服従になつて希望を失うような有り方であつてはならない、ということをやヨブの訴えのアンバランスさに確認するのです。

そうであるならば、私たちはもはやアンバランスな人生であることを嘆く必要はありません。むしろどのような言葉、たとえ反抗的な言葉であつたとしても、信頼して神さまを呼び求め、神さまに従つて生きるところにこそ、揺れ動く私たちの望みがあるのだ、ということを受け止めたのです。信仰は楽な道ではありません。しかしこの道を歩いてこそ、私たちは決して裏切られず失われない愛と赦し、そして永遠の命に生きる喜びに生きられるのです。この恵みを与えられた者として生き、この恵みに生きられる希望を一人でも多くの人にのべ伝えていきたいと思ひます。